

このコーナーでは、
営農指導員から、農業のちょっと
したコツをお知らせします。

農業振興課農畜産振興係 ☎0824-73-1227

野菜作りの ワンポイントアドバイス

営農指導員 若山 譲
わかやま ゆずる

10月の野菜畑の管理

10月は夏野菜の最終収穫と秋野菜の種まき・植え付け、土壌改良などの冬支度の準備が重なる重要な時期です。

10月の丁寧な畑管理が、冬の収穫と翌春の豊かな収穫につながります。

収穫作業

10月は夏野菜の最終収穫の時期です。霜に弱い野菜（トマト、ズッキーニ、カボチャ、メロンなど）は、初霜前に収穫を完了させることが重要です。葉物野菜ではコマツナ、ホウレンソウ、ミズナが生育のピークで、根菜類ではカブ、ダイコンの早生品種が収穫期に入ります。

種まき・植え付け

10月は冬野菜の種まきや植え付けのラストスパートです。コマツナ、ホウレンソウ、シュンギク、レタスなどの葉物野菜は、10月上旬に種まきすると年内収穫が可能です。10月中旬以降は年明けの収穫向けに準備します。

豆類（エンドウ、ソラマメ）は

連作を避け、ポットまきや直まきで管理します。プロッコリー、キャベツ、カリフラワー、チンゲンサイなどは防虫ネットを掛けることで、青虫やヨトウムシなどの被害を防ぐこともできます。

土壌環境と環境整備

土壌は排水性を確保しつつ、堆肥などを施用して保水性を保ちます。苗間はやや広めに取り、風通しを良くして病気（灰色カビ病、うどんこ病など）の発生を抑えます。

害虫・病害対策

10月は病虫害の活動が低下しますが、アブラムシやヨトウムシなどは引き続き発生します。早期発見、早期防除が基本で、必要に応じて殺虫剤や殺菌剤を散布します。

作業のポイント

- 夏野菜は潔く撤去して畑を空け
- 冬野菜の準備に切り替える
- 収穫と冬野菜の種まき・植え付けを同時進行で行う
- 苗や種の栽培情報を確認し、適切な株間・植え付け溝を守る
- 気温や日照の減少に応じて、寒冷紗やホットキャップで保温・防風対策を行う
- 作業記録や写真・メモを残し、冬の間に次年度の計画を練る

花作りの ワンポイントアドバイス

営農指導員 永奥 啓
ながおく はじめ

秋の花弁栽培管理

秋は、主に翌年の春から夏にかけて咲く花の種まきや球根の植え付け、宿根草の株分け、花木の植え付けを行う時期です。

ただし、庄原地域でも特に標高が高い地域では、一部の作業は春に行う方が良い場合があります。

秋に植える・種まきする花の一例

- ① 種まきする花の例
シンテツポウユリ、ハナムギ、ハナナ、キンセンカ、ニゲラなど
- ② 球根を植え付けする花の例
ユリ類、アイリス、アリウム、スイセン、チューリップ、フリージアなど
- ③ 宿根草、切り枝花木など
リンドウ、オミナエシ、ミヤコワスレ、サクラ、モモなど

シンテツポウユリの栽培

① 栽培の特徴
ユリ類の栽培は、通常、球根を植え付けて行いますが、シンテツポウユリは種子から育てるのが特徴です。近年では育種が進み、従来のテツポウユリと比べても品質に遜色がなくなっています。その

ため、比較的容易に栽培できるユリとして、栽培が増えています。

② 作型・種まき

11月中旬頃にハウス内の小トンネルで種まきし、5月頃に定植すると、8月から9月にかけて切り花ができます。また、切下球（二度収穫した後の球根）を用いて、翌年度の栽培に使うことも可能です。比較的低温で発芽しますが、庄原地域では11月中旬頃にハウス内に小トンネルを作り、その中に条まきするのがお勧めです。

オミナエシの栽培

① 栽培の特徴

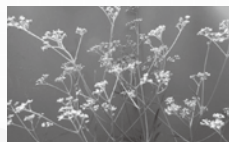
仏花としてお盆やお彼岸に特に多く必要とされる花です。寒さに強いので、庄原地域に適した花といえます。

② 作型・繁殖

一般的には、春にハウスまたはトンネル内で種まきし、本葉が5〜6枚になったところで定植します。

株分けは秋でも春でも可能ですが、標高が高い地域では、春の方が安全です。

品種や系統により開花期に差があるため、お盆向けと秋のお彼岸向けでは、品種・系統を分けて栽培します。



▲オミナエシ